



東京の会通信

No.324

2026年1月1日号
(隔月1日発行)

発行：骨髄バンクを支援する
東京の会
〒101-0031 東京都千代田区
東神田1-3-4 KTビル3階
TEL：03-3866-8171
(FAX兼用)



<http://www.marrows.or.jp/tokyo/>
e-mail.marrows_tokyo@yahoo.co.jp

定価 100 円

チャリティコンサート「響」 今年は新しい感動がありました！

毎年秋恒例の「チャリティーコンサート響」が、東大キャンパスが紅葉で黄色く染まる11月23日、例年通り「求道会館」で開催されました。

開演前、ロビーコンサートで高田眞佳（まなか）さんのヴァイオリン演奏が披露されました。また三戸さん、小澤さん、高田さんの演奏前には、ミニシンポジウムとして骨髄バンクを介したドナーからの移植患者安藤博文さんと、骨髄を提供した増田天道さんが、宮本大志さんの進行で体験談を語ってくれました。

コンサートでは、新曲が披露されるなど、3名のいつものながらの素晴らしい演奏に、参加してくれた74名が感動に包まれました。

演奏いただいた三戸素子さんからの投稿と、参加した方からの感想を掲載いたします。

特別なプログラムを企画した今年のコンサート

ヴァイオリニスト 三戸素子

秋恒例の「ピアノ三重奏コンサート」が、今年も1都2県で開催されました。東京の会は11月23日(日)で、本郷にあるレトロな建築で都の重要文化財である求道会館が会場です。

今年のコンサートは例年にも増して充実した内容でした。クラシックのコンサートといえば、1世紀も2世紀も前に外国で作られた音楽を想像しますが、今年は骨髄バンクチャリティコンサートのために書き下ろされた、日本の作曲家による新曲を演奏したのです。徳備康純(とくび やすずみ)氏のヴァイオリンとチェロのための二重奏曲「風に…」は、私たち日本人にも馴染みのよい和テイストの音列を発展させて緻密に作られており、私たち演奏家にとっても演奏し甲斐のある曲でした。日本語で語られているような感覚のこの新しい音楽を、ご来場の皆様は熱心に集中して聴いて下さり、おおいに気に入って下さいました。

もう30年以上も骨髄バンクチャリティコンサートで

やってきましたが、この会からこんな立派な曲が生まれるとは想像もしていませんでした。私たちはこの骨髄バンクのために作られた曲を、いろいろなところでもっと演奏したい、海外でも演奏したい気持ちでいっぱいになりました。

もうひとつ、今年のコンサートはスペシャルなコーナーがありました。それはコンサートが始まる前のロビーコンサートとして、ピアニストの高田さんのお嬢さんの眞佳(まなか)さんが、お母様の清佳(さやか)さんの伴奏で、ヴァイオリンを弾いてくれたのです。小さい時から専門的に習っているだけあって、9歳にし



日本骨髄バンクの登録患者と検査済登録ドナー (令和7年11月末日現在)

	ドナー(全国)	ドナー(東京)	患者(全国)
登録者累計	566,443	72,080	72,577
10-11月登録分	6,277	747	403
10-11月抹消数	4,393	591	—
実質登録増	1,884	156	—

患者とドナー登録・適合状況(11月末日現在)

ドナー登録受付者数(累計) 1,017,378人
 ドナー登録抹消者数(累計) 450,935人
 HLA適合報告ドナー数(累計) 404,620人
 実質登録患者実数(現在) 1,773人(国内1,184人)
 HLA適合患者数(累計) 57,628人(患者累計数の79.4%)
 非血縁移植実施数 30,226例(10-11月実施201例)



て難曲を堂々と弾きこなして、お客様からも盛大な拍手が起きました。

このチャリティコンサートが社会貢献だけではなく、今年立派な音楽現場になっているのがとても嬉しく、また東京の会のボランティアの皆様

様が力を結集して下さったおかげだとあらためて思います。

高田さんのピアノによるショパンや、ゴージャスなチャイコフスキーの三重奏曲も演奏され、トークコーナーの生きた体験談など、盛りだくさんな、紅葉の美しい秋の一日になりました。

みんなで作り上げた魂の演奏会

今年も秋のチャリティーコンサートが終わりました。例年にも増して、盛りだくさんで内容の濃いコンサートだったと思います。

開演前にはロビーコンサートで高田真佳ちゃん（9歳）のヴァイオリン演奏。すごく緊張していると言っていました。約8分の難曲を堂々と弾ききりました。コンクール用に練習していた曲だそうですが、今日のために準備してくださったことに感謝したいと思います。

患者さんとドナーさんを迎えてのミニシンポジウムの後、本編のピアノ三重奏はいつも通り最高のクオリティで、お客様も集中して聴いて下さっているのがわかりました。

また、2曲目の「風に…」というヴァイオリンとチェロの二重奏曲は、骨髄バンクチャリティーコンサートのために作曲家の徳備康純さんが書き下ろして下さって、今年、円覚寺で初演されたものです。今は現代曲ですが、骨髄バンクがきっかけのクラシック誕生の瞬間だと思うと感無量です。これからも、いろいろなところで演奏されるといいなと思いました。

当日来てくれた知人が「あのコンサートは魂の演奏会。金井さんという方も、毎年会場のどこかで楽しそうに聞いている気がします」と感想をくれました。今年求道会館を満席にすることはできませんでしたが、たくさんの方の協力で素晴らしいコンサートになりました。

皆様、お疲れ様でした！ありがとうございます！！
(福永 達子)

今年も素晴らしい演奏に、ブラボー！

本郷三丁目の駅を降りるとまず東大構内に入り、秋の空に見事に黄色の葉が映える銀杏を観に行きました。外国人観光客らしい人々など賑やかな人の渦が出来ていました。

そこからすぐの静かな求道会館、私はまっすぐ2階

に上がりました。音響が良いという噂を口実に、なんのお手伝いもしなかった後ろめたさからひっそりと、しかしほぼ真ん中に近い最前列の席に坐りました。

すぐに高田さんのお嬢さんの演奏が聞こえてきました。お母様との素晴らしい演奏、その後すぐに2階に上がってこれました。私は再び拍手をしましたら驚いたように大きな目を開けて丁寧に御挨拶され、私の方が思わずもじもじしてしまいました。

恒例のお三方の熱演にはいつもながら感激しました。私にはとくにチャイコフスキーの音が痛切に響いたので「ブラボー」の声を上げました。そしてアンコールが「ジ・エンターテイナー」、なんとも嬉しい一日でした。
(及川 耕造)

どの会場でも愛と優しさに溢れたコンサート

主に神奈川で活動する私は、円覚寺開催が当たり前のコンサートですが、昨年初めて東京の会のコンサートに参加させていただき、すっかり求道会館の素敵な雰囲気の中になりました。

今年には自分に与えられた役目の関係上、一部は1番後ろ、二部は1番前のお席という貴重な経験になりました。後方では素晴らしい音楽はもちろんのこと、お客様の背中を感じることができ、皆様何に思いを馳せていらっしゃるのだろうと、その背中までもが、ステージの一部になり感動は膨らみます。

二部は、演者の横という息遣いもが聞こえる贅沢な席です。ピアノの高田さんの指、チェロ小沢さんの音楽を愛でる表情、ヴァイオリン三戸さんの波打つ背中を目の前に、こんなにも長い歴史を紡いでくださっている演者さんは何を想い、何を感じて演奏しているのか、あたかも演奏者と自分だけの空間の中、私の心は「想い」という響きで溢れていきました。

素晴らしいロビーコンサート真佳ちゃんの演奏では未来、希望をいただくことができました。

「響」その名前の通りの素晴らしい響きは、愛に溢れ、優しさに包まれた素晴らしいコンサートでした。

(小石川 知子)



奇跡と絆がくれた新しい未来

宮本弘子

Message from Recipient

毎年11月3日文化の日になると、病気のことを思い出します。

私は2013年の秋、白血病を発症しました。その数年前から、胸が不定期に痛むことがありました。痛みは1時間ほどで収まるのですが、突然来るのでいつも不安でした。何度か検査もしましたが、原因不明のまま何年か経過していました。

そんな中、2013年11月3日に私は激しい胸痛により、救急車で病院に運ばれました。ちょうどその日は祝日で子供たちもまだ寝ており、学校もない。「今日なら行ける」と思い、主人に子ども達を託し、自宅近所の消防署から病院に運んでもらったのです。

胸の激痛に耐えながら、救急車の中で内心ほっとしていました。「あ～、これで痛みの原因がわかる。治し方が見つかるかもしれない」と思ったからです。

すぐ帰るつもりだったので、お財布と携帯電話しか持たずに出ましたが、なんとどこから6か月間の入院生活が始まることになったのです。

痛みが強かったので、その日は帰宅できませんでした。翌日、検査結果を聞くために医師に呼ばれました。真剣な面持ちで「実は血液の病気が見つかりました」と告げられました。まず頭をよぎったのは、これは遺伝する病気なのかどうかということでした。答えはNO。とりあえず子供たちは大丈夫だと、安堵したのを覚えています。そこからは病気の特性、治療に向けての方針など、詳しいことを聞く時間が設けられたのですが、同席した主人の方が顔が真っ青になってショックを隠しきれず、私の方が意外と冷静だったように思います。あまり現実味がなかったのかもかもしれません。

私の病気は「急性リンパ性白血病フィラデルフィア染色体陽性」というものでした。全く予想もしていなかった病気だったので、本当に驚きました。

私には兄と弟がいます。まず二人のHLA型を検査することになりました。結果は弟とフルマッチでした。これまでも兄弟がいることを有難く思っていたのですが、この時は今まで以上に両親に感謝しました。こうして私は、血縁者かつ自分より若く体が大きい、そしてフルマッチというこれ以上ない好条件で移植に向けて治療に臨めることになったのです。

長期の入院と本格的な治療の開始に向けて、いろいろと準備すべきことがありました。私が病気になったことで家族に与える影響は、実に大きなものでした。まず当時小学4年生だった長女と1年生だった長男のことを考えなくてはなりません。主人は仕事と私のケアに手いっぱいでしたので、2人を実家に預け、一時的に転校させることになりました。

ある朝、目が覚めたら母親がおらず、急に入院を告げられ、しばらく転校や祖父母の家で暮らすようにと言われたのですから、相当ショックだったと思います。二人ともよく耐えて頑張ってくれたと、今でも有り難く思っています。小学生以下の子供は感染症予防のため、病室には入れません。2人とはいつもロビーで会いました。私の体調や検査結果が芳しくない時はロビーには行けないので、せっかとお見舞いに来てくれ

ても顔も見ずに帰らせてしまうことも何度かありました。辛くて申し訳なくて、涙が止まりませんでした。

また面会時は必ずマスク着用と決められていました。血液疾患の患者は免疫力が低下し、菌に弱いからです。まだコロナ禍以前の世の中だったので、日常でマスクを着用することは稀なことでした。にもかかわらず、2人は学校でもずっとマスクをしていました。ある時音楽の授業で、歌う時やリコーダーを吹く時だけはマスクを取るようにと先生に強く言われたそうです。でも「ママにばい菌をもって行ったら、ママが治らなくなっちゃうかもしれない。だから絶対に嫌だ!」と断固として譲らなかつたそうです。病氣と闘っていたのは私自身だけじゃないんだと思いました。子供たちの健気な頑張りには、私に絶対治るという決意を更に強くさせました。

家族をはじめとした周囲の方々への支えは、薬と同じくらい、いやそれ以上に必要不可欠なものであり、私の心を強くしてくれました。そして仲間は病院の中にもいました。同時期に入院していた患者さん達です。10代から60代以上まで年齢もバックグラウンドも様々な人たちが、それぞれの疾患と闘っていました。自ずと励まし合うようになり、そのうち「夜会」というものができました。面会時間が終わり消灯までの1時間に共有スペースに集まり、他愛もないお喋りをするのです。時には先輩患者さんが新入り患者さんにアドバイスしたり、弱気になっている仲間を励ましたり、退院したらやりたいことを語り合ったり・・・。たまに看護師さんもゲスト参加して恋バナなんかもしました!この時間は当事者しかわからないような小さなつぶやきも共有できる、かけがえのない大切なひと時でした。

白血病の治療は本当に辛いものであったことは間違いありません。いろいろな方の体験談や医学書でご存知の方も多いと思います。でも私自身はただただ目の前の「白血病」という敵と向き合えばいいわけで、弟がくれた最高級の造血幹細胞という武器もありました。私よりもっと辛いのは近くで見守り支え励ましてくれた主人であり、子どもを愛で包んで安心させてくれた両親であり、不安のなか心を強く持って一緒に戦ってくれた幼い子供たち、そして暖かいエールを送ってくれた友人達だったと思います。

あの日ももし病院に行かなかつたら、手遅れになっていたかもしれません。

もし兄弟とHLAの型が適合しなかつたら、移植が受けられなかつたかもしれません。

もし家族や友人の支えが無かつたら、不安と恐怖に押しつぶされて病気に勝てなかつたかもしれません。

周りの方々も、何もできないと悩まれたり、不安が募る毎日だと思えます。でもそばに寄り添ってくださるだけで、ものすごいパワーをいただいています。患者と同じくらい頑張ってくださっているのですから。

移植から11年が過ぎ、今も元気に過ごしています。全ての幸運に感謝しています。これからは小さなことからでも、少しずつ私ができることで恩返ししていきたいと思っています。もう一度いただいた命を大切にこれからも頑張っていきます。

ブルデンシャル生命のミーティングで 移植体験を語りました

ブルデンシャル生命では、骨髄採取をするために入院した善意のドナーが、骨髄採取をする際の経済的な負担を軽減するための入院給付金をお支払いする制度「ドナー・ニーズ・ベネフィット」を日本国内で初めて2005年4月に導入されました。私たち、骨髄バンクのドナーを増やす活動をしているボランティアにとって、この制度は、ドナー登録の後押しをしてくれる仕組みとして大変有効です。

そのような関係からブルデンシャル生命の社員の皆さんは、ドナー登録に積極的に関わってくださっています。

この度、ドナーとして骨髄提供した田中宏治さんから、ご自身の職場であるブルデンシャル生命東京第五支社の社員ミーティングで骨髄バンクについての話をしてほしいとのオファーを受け、ボランティアリーダーの土屋泰裕さんと打ち合わせを重ね、11月20日ミーティングに参加させていただきました。

東京の会から、弟さんからの骨髄提供で病気を克服した宮本弘子さん（今号の「患者からのメッセージ」参照）と、骨髄バンクを介して骨髄移植を受けた小松崎辰哉さんに参加していただき、ご自身の体験談を語っていただきました。小松崎さんより、参加しての感想を投稿いただきました。

～骨髄移植体験患者より

「苦しい闘病を振り返って感謝を伝えたい」～

小松崎 辰哉

2025年11月20日、私は「骨髄バンクを支援する東京の会」の活動としてブルデンシャル生命保険株式会社、社員の方々約60名の前で、初めて骨髄移植体験患者としてお話をする機会をいただきました。

当日の会場の様子は、参加者全員が真剣な眼差しで私のお話を聴いていただきました。

お話の内容は、①2023年1月に急性骨髄性白血病の診断を受けたとき。②病気との付き合い方。③病気の再発を知ったとき。④2024年9月に骨髄バンクを介して善意のドナーさんから骨髄提供を受けたこと。⑤今後の夢について。の5点を柱にお話をしました。

特に初めて白血病の診断を受けたとき、88歳の父親や妻を残していくことへの不安。病気の再発を知ったときのショック。私の白血球のHLA型と一致するドナーさんが見つかった時の喜びを、素直に参加者へ語りかけました。

ブルデンシャル生命保険株式会社は、社内で日ごろより骨髄バンク活動について支援していただいていること、参加者のお一人が過去に2回骨髄提供者だったことを知り、皆さまのおかげで私のいのちがつながったことへの感謝のことばを伝えました。

参加者より「直接、移植患者の生の言葉を聞いて切実な思いになった」という感想や「骨髄バンクについて家族に理解を求めるためのきっかけを知りたい」などの質問をいただきました。

骨髄バンクを応援する「たすき」のリレーで完走！

10月13日「2025グリーンリボンランニングフェスティバル」が、駒沢公園陸上競技場で開催されました。

グリーンリボンは、世界的な移植医療のシンボルです。グリーンは成長と新しいいのちを意味し、“Gift of life”（いのちの贈りもの）によって結ばれた臓器提供者（ドナー）と移植が必要な患者さん（レシピエント）のいのちのつながりを表現しています。グリーンリボンキャンペーンは、移植医療を通して、臓器を提供してもいいという人と移植を受けたい人が結ばれ、よりたくさんいのちが救われる社会の実現に向けた、『移植医療』の理解促進、普及及び啓発につながる取り組みの総称です。

この活動に、全国協議会では首都圏のボランティア団体と協力して、骨髄バンクを知ってもらうためにブースを借り、ティッシュ配りやランナーの応援をおこなっています。

移植を受けたランナーの元気な姿にエールを！

移植医療を考える日「グリーンリボンデー」に合わせて開催された「グリーンリボンランニングフェスティバル」の応援ボランティアに参加しました。

配布するリーフレットとティッシュを、全国骨髄バンク推進連絡協議会ブース近くだけでなく、スタジアムに下りて、ランナーやご家族、支援者さん方へ手渡しました。受け取ってくださる方々の笑顔と、エコ風船を一齐に飛ばすバルーンセレモニーで、スタート直

前の熱気と優しく見守る想いが伝わってきました。

私達が応援する、神奈川骨髄移植を考える会メンバーのチームがコースを周回する度にエールを送って、待っている間の沿道での立ち話も盛り上がりました。ゴールの瞬間をスタジアムの中で間近で見届けて、記念写真では表彰台のステージに上がることもできました！

骨髄移植の支援に関心を持った延長で、臓器移植全般も理解したいと思うようになる機会でした。

参加されていた皆さんそれぞれの思い、医療職の方々へのリスペクト、医学の進歩に期待して、秋の素敵な時間を過ごした一日でした。(園山 千夏)

移植患者として元気をもらえた1日でした

2025年10月13日、駒沢オリンピック公園陸上競技場およびジョギングコースで2025グリーンリボンランニングフェスティバルが開催されました。天気が良く皆さんの元気ハツラツが伝わってきました。

42.195kmリレマラソンを神奈川の会で1チーム出場。9人でタスキをつないで完走しました。骨髄移植体験者も参加しました。元気に走りました。とても素晴らしい。私も骨髄移植体験者なのですが、走ると胸がバクバクいってしまい治るのに時間がかかります。そんな自分とは違うことにビックリ。元気をもらいま

した。

移植医療のシンボル「グリーンリボン」を冠したランニングフェスティバル。移植医療



を受けた方をはじめ、障がいのある方もない方もみんなて走る喜びを分かち合ひましょう、がテーマです。

臓器移植の方、目が見えない方が伴走者とともに走る光景も初めて見ました。人間が生きようとする姿がたくましく、前を向いて走る姿が感動そのものでした。

(安藤 博文)

スノーバンク2025 ~今年も盛大に開催！

2025年11月8日・9日の土日、毎年恒例のスノーバンク2025が代々木公園イベント広場で開催されました。献血バス4台で2日間に献血400名、骨髄ドナー登録100名を目標に実施しました。初日は秋らしい良い暖かい天気だったので、献血待ちの方も穏やかに気持ちよく臨んでくれました。2日目は終日雨模様で、午後一時雨は止みましたが、前日と打って変わってとても寒く、献血バスの前も雨漏りと水たまりで待つのも大変でした。

東京の会から2日間で11名の説明員と4名のボランティアが参加しました。15年間も続いているイベントなので既登録が多くすでに登録している人が何と99名！ドナー登録数は49名と目標には達しませんでした。

参加した方からの報告です。

初めて体験したスノーバンクボランティア

スノーバンク会場中心の特設ゲレンデでは、スノーボーダーが拳を付け合わせて挨拶しており、その文化は私にとって馴染みのないものだった。幼少期から20年以上サッカーを続けてきた私には、この集団が醸し出す独特の雰囲気の中で、まるで蚊帳の外にいるように感じた。

ただ、私が骨髄バンク啓発のためにティッシュを配ると、「献血しました」「骨髄バンク登録しています」という声が当たり前のように返ってきた。

造血幹細胞移植に関する知識を問う骨髄バンククイズを呼びかけると、20名ほどが足を止めてくれた。回答とともに、自身の闘病経験や移植に関する正確な知識を伝え、「今すぐでなくても、周囲の人でもいいから協力してほしい」という強い思いが、参加者の方々の心に少しでも届いたと思う。



ボランティアを含めた主催者とスノーボーダーの思いが合わさり、協力的なイベントの空気を作り出していた。今回の経験を通じ、「誰か

ではなく私たちがやる」という主体性を実践できたと感じた。(中村 倫士)

既登録が多い歴史と喜びを感じるスノーバンク

毎年スノーバンクには、ドナー登録説明員として参加しています。今年は2日目に参加しました。

朝からあいにくの雨で、テントから雨漏りする程のどしゃ降りの時間もありましたが、朝一番はたくさんの献血予約の方々が列を作って来てくださいました。

その混んでいる最中にNHKの取材が入り、カメラとインタビュアーが登録のテーブルに張り付いて、問診に進む人が通れなくて、「何でこの時間に？昨日の内に取材に来て放送してくれていたら、それを見て今日来てくれる人が増えたかもしれないのに…」と文句が出そうになりましたが、直ぐお昼の情報番組で放送されたと聞き、うれしくなりました。

朝の列が解消された後は、献血はスムーズに進み、待ち時間が無かったので、「ドナー登録の説明を聞きませんか？」と声掛けして時間が無いと断られることはなく、雨のおかげでたくさんの方に説明が出来、登録数も伸びました。

既に登録していますという方が続々と、こんなにドナー登録している人がたくさん集まる所は他には無いのではとスノーバンクの素晴らしさを実感しました。

(松下 倫子)

心のこもったご寄付ありがとうございました。(2025.10.16~12.15)

小柴良介さん 2,000円／奈良誓夫さん 10,000円／大浦幸一さん 2,000円

チャリティコンサート『響』募金総額 74,270円

お寄せいただいたご寄付のうち、会費未納の会員からは会費(年3,000円)を差し引いて掲載させていただきました。



▼12月17日、品川のさくらプリンス東京タワーで開催された「東京港南マリンロータリークラブ」のクリスマス家族懇親会にお招きいただき、9月に行なわれた「しながわ宿場まつり」におけるチャリティバザーの収益金を、東京の会にご寄付として贈呈いただきました。長年にわたるあたたかいご支援に深く感謝申し上げます。

▼東京の会の20周年記念誌によれば、「東京港南マリンロータリークラブ(当時の名称は東京マリンロータリークラブ)」と東京の会の関わりは、1993年にさかのぼります。ロータリークラブの会員で「品川運輸」社長の毛塚真次さんが、奥様の翠さんが白血病になられたことから東京の会にご連絡いただいたのがきっかけだそうです。翌年には宿場まつりで第1回のチャリティバザーが開催されました。

▼東京の会は1990年6月「公的骨髄バンクを望む東京の会」として発足しました。翌1991年12月に日本初の公的骨髄バンクとして「骨髄移植推進財団(現:日本骨髄バンク)」が設立され1993年1月に公的骨髄バンクを通じた初の非血縁者間骨髄移植が行われました。

▼「東京港南マリンロータリークラブ」様には、東京の会、そして骨髄バンクのまさに草創期から今日まで、32年の長きにわたりご支援をいただいているのです。当時の東京の会にとって、宿場まつりでのバザー収益金のご寄付はとても貴重なものだったと思います。そしてそれは今でも同じです。

▼また、東京の会の事務所が現在の全国協議会事務所に移転するまで、この「東京の会通信」の発送作業(通称おりおり)は「品川運輸」の会議室をお借りして行っていました。手作業で会報を折っていたことから「おりおり」と呼んでいたのですが、2003年にロータリークラブから紙折り機を贈呈いただき、作業が劇的に早くなりました。

▼本当にお世話になった毛塚真次さん、そして骨髄移植を受けて元気になられた奥様の翠さんも残念ながらお亡くなりになってしまいましたが、娘さんで「品川運輸」現社長の毛塚久恵さんをはじめ「東京港南マリンロータリークラブ」の皆様には、継続して東京の会をご支援いただき、本当にありがとうございます。

▼11月に行なわれたチャリティーコンサートも1992年から続いています。東京の会においても、諸先輩の皆様の思いを引き継ぎ、地道に活動を続けること、そして活動を通じて築かれた「ご縁」を大切にすることが重要だと改めて感じています。

皆様、2026年もどうぞよろしく願いいたします。

(S)

東京の会 「1月、2月定例会」 のお知らせ

1月24日(土)午後5時30分より(※第4土曜日です!)

2月21日(土)午前5時30分より

定例会は、現地会議室集合以外に、オンライン(Zoom)での参加も可能です。

会場：全国協議会事務所(千代田区東神田1-3-4 KTビル3階)

交通：都営新宿線「馬喰横山」駅 徒歩5分

都営浅草線「東日本橋」駅 徒歩7分

東京メトロ日比谷線「小伝馬町」駅 徒歩7分

JR総武快速線「馬喰町」駅 徒歩5分

3月会報発送 「おりおり」のお知らせ

日時：3月1日(日)14時より

※発送作業は会報が発行される奇数月のみとなります。

※最新情報を東京の会ホームページ等で確認の上、お越しください。

場所：全国協議会事務所(千代田区東神田1-3-4 KTビル3階)

交通：都営新宿線「馬喰横山」駅 徒歩5分

都営浅草線「東日本橋」駅 徒歩7分

東京メトロ日比谷線「小伝馬町」駅 徒歩7分

JR総武快速線「馬喰町」駅 徒歩5分

※5月「おりおり」予定 2026年5月3日(日)14時より

※今お読みになっている「東京の会通信」を折って封入し発送します。どなたでもご参加いただけますが、なるべくマスク着用の上、患者さんや元患者さん、持病のある方やご年配者など、感染リスクの高い方はご無理のないようにお願い致します。なお、状況により発送作業を中止する場合は、メーリングリストやホームページ等でお知らせしますので、ご確認ください。